

**NHK 番組「追跡！真相ファイル: 低線量被ばく揺れる国際基準」
(平成 23 年 12 月 28 日)の事実誤認の詳細**

1. 「世界各地で、極めて低線量の被ばくでも健康障害を受けた人々がいる。」

(1)スウェーデンのサーメ族に関する番組ナレーション(この番組のナレーション書き下ろしを参考資料—1に添付します)で「ICRPがほとんど影響がないとしている低線量でも、ガンになる人が増えていたのです」と言っています。

年間「0.2mSv」という放射線の値はチェルノブイリ事故直後のヴェステルポッテン県のデータで、スウェーデン政府が発表した公式の数値です。また、ガンになる住民が「34%」増加した原因は診断精度向上や高齢化、生活習慣の変化など多くの要因があり、すべて放射能の影響だとする報告はありません。NHK番組ナレーションは明らかに“**低線量の被ばくでもガンが増えた**”という間違ったメッセージを与えたと言えます。

(2)イリノイ州原発周辺住民に関する番組ナレーションで「…ここでは、より影響を受けやすい子供たちに、深刻な問題が起きていました。…原発から排出される汚水には、放射性トリチウムが含まれていますが、アメリカ政府は、国際基準以下なので影響ないとしてきました。しかし近くの町では、子供たちがガンなどの難病で亡くなっていました。足元のレンガには、これまで死んだ100名の名が刻まれています」と言っています。一部住民側と行政側との間に意見の対立があるのは事実ですが、住民側の主張を一方向的に伝え、視聴者に「**100 人の子供がトリチウムの影響で亡くなった**」のが事実であるかのような間違った認識をさせてます。

2. 「ICRPは、低線量被ばくに関するリスクについて適正な見直しを行わず、防護基準を甘くしている。また、ICRP という組織自体が原発を進めたい側が作った組織である。」

(1)ICRP の Chris Clement 事務局長のインタビューでの次の発言、

“They are not just looking for the numerical values of DDREF, but the whole concept of whether or not it still applies.”

を、正しくは「単に DDREF の数値のみでなく、その概念が今日でも適用出来るのかを検討している」と訳すべきところを、NHK番組ナレーションでは「**低線量のリスクを半分にしていることが本当に妥当なのか議論している**」と日本語訳しています。

DDREF(線量・線量率効果係数)とは線量をゆっくり受けた場合は短時間で受けた場合に比べ効果は減じられるとする係数であり、これを「低線量リスク」と訳すのは恣意的な誤訳であり、番組ナレーションはクレメント氏の発言を全く誤訳し、あたかも **ICRP が低線量リスクを見直そうとしていると間違ったメッセージ**を番組で伝えています。

(2)同じくChris Clement事務局長のインタビューで「ICRP は低線量のリスクをどう見直そうと
しているのか。…事務局長のクリストファー・クレメント氏です。既に作業部会を作り、議論を
始めているといいます」と番組ナレーションでは言っています。

ところが、2月13日に学士会館で開かれた日本アイソトープ協会主催の勉強会「ICRP を
読み解く—第2回—」における講演で、ICRP 主委員会委員の丹羽太貫先生は、「ICRPでは
リスク評価のためのモデルや係数の適用に関する科学的検討は継続されているが、**低線量
リスクそのもの見直しを行っている事実はない**」と明言されており、NHK番組では明らかに
間違ったメッセージを伝えています。

(3) NHK番組ナレーションでは自分たちで作った図面(参考資料—2参照)を使って次のよう
に説明しています。

「低線量のリスクを巡る議論は、実は1980年代後半から始まっていました。基準の根拠とな
っていた広島、長崎の被曝のデータが、この頃修正されることになったのです。**それまで原爆
で1,000mSvの被ばくをした人は、5%ガンのリスクが高まるとされてきました。**それが日米の
合同調査で実際はその半分の500mSvしか浴びていなかったことが分かったのです。半分
の被曝量で同じ5%ということは、リスクは逆に2倍になります。しかし、ICRP では低線量では
半分のまま据え置き、引き上げないことにしたのです。」と言っています。

ところが、「それまで原爆で1,000mSvの被曝をした人は、5%ガンのリスクが高まるとされて
きた」といった事実はどこにもなく、ICRP1977年勧告(Pub 26)によると「2%ガンのリスクが高ま
るとされてきた」と言うのが事実です。

また、NHKは、「ICRP では低線量では半分のまま据え置き、引き上げないことにしたので
す。」と言っています。すなわち、被ばく線量の見直し前も、見直し後も「100mSvでは0.5%のガ
ンのリスクが有る」と言っているのですが、しかしICRP1977年勧告(Pub 26)によるとその値は
100mSvで0.1%であり、1990年勧告(Pub 60)によると0.5%なので、ICRPは実際には5倍にリスク
を高めています。すなわちNHKは全くの誤報道をしたのです。

下表にNHKの報道とICRP勧告に則したリスクを示します。

	原爆による被ばくのガンリスク 1000mSv当たり		ゆっくり(低線量)被ばくのガンリスク 100mSv当たり	
	NHK	ICRP	NHK	ICRP
1990以前(Pub26)	5%	2%	0.5%	0.1%
1990以後(Pub60)	10%	10%	0.5%	0.5%

(4) NHK番組ナレーションで「その後 ICRP は原発などで働く労働者のために、特別な基準
を作ります。半分のままに据え置かれた低線量のリスクをさらに20%引き下げ、労働者がより

多くの被曝を許容できるようにしたのです」と言っています。

ICRP は、1990 年勧告で、リスク係数を一般公衆に対しては1Sv 当り5%、作業従事者については1Sv 当り4%と、後者に対しては20%小さな値をとっています。しかし、これは一般公衆に対しては生涯を通じたリスク計算をし、作業従事者に対しては仕事に従事している期間(50 年と仮定)におけるリスク計算をし、年数が異なる結果です。また、労働者の健康管理のための基準は線量限度であり、1977 年勧告における年間50mSv から、1990 年勧告では5年間100mSv(年平均20mSv、年最大50mSv)へと、逆に**2.5 倍厳しくしているのにNHK番組ではこの事実に触れていません。すなわちNHK番組は、“ICRPは基準を緩くした”との間違っ**たメッセージを与えました。

(5)NHK番組の中で追跡サポーターの室井佑月さんが「**ICRP 自体が原発を進めたい側がつくった組織だから、その組織が安全規制値を決めるわけですから、それじゃあいけないわけですよ**ね」と発言しています。これを画面中の鎌田氏は頷いて実質的に肯定しています。

番組では、ICRP の運営資金の主要な拠出組織が5つ紹介され、米独加は明らかな規制組織であり、EU 委員会も直接原発推進に係る組織ではありません。日本からの拠出も旧科学技術庁傘下で規制支援の安全研究を実施していた旧日本原子力研究所であり、旧原研は2007 年に旧サイクル機構と統合して日本原子力研究開発機構(JAEA)となり、ICRPへの拠出も引き継がれましたが、本来推進機関としての負担を意図したものではありません。従って「**ICRP は原発推進側が作った組織である**」との放送は視聴者に**間違っ**た認識を与えています。インタビューに答える第三者の発言ではなく、NHKとの契約による出演者の発言であり、そのまま採用したのはNHKがそれを是と判断したものと理解されます。

以上、具体的にこのNHK番組の事実誤認箇所を指摘いたしました。さらに放送倫理基本綱領に照らしても放送内容の偏りや伝え方の不適切さが多くみられます。

放送倫理検証委員会におかれましては、同番組を審議していただき、NHKに対して間違いを正し、それを公表するとともに再発防止を強く要求していただきたく、お願い申し上げます。